と、梅の名寄せの曲節が、又もや市中の人達に流布された。

なほ七月にも續いて宇治の古淨瑠璃『いろは物語』を出し、『一心五戒魂』をも上演した。かういふ風にだん〳〵興行は續けてゐるが、義太夫の本領は後年、自身の爲めに始めて近松が作をした『出世景清』や、さらに新らしい試みとして社會戯曲『曾根崎心中』が書かれるに及んで、始めて多年の苦心と共に世の中へ現はれ出したのであるから、先づ義太夫座としては試練時代とも云へる。

此年五月十九日、井上流の祖、井上播磨掾が死んだ。かくて我古淨瑠璃の二大巨頭の一つは缺げて、殘るは京都の宇治加賀掾ばかりとなつた。

宇治加賀掾筆蹟

敵は師匠

老藝術家の悲哀

涙の義太夫

義太夫旗上げの報は日ならず、京都の宇治加賀掾の耳を驚かした。かつては我が門弟であつて、まだ嘴の青い若輩者の理太夫が、僭上至極にも、井上流でも宇治流でもない新派と稱する旗印を上げて、わが古淨瑠璃に對して反旗を翻へす不敵の振舞ひ、而かも已が名の義太夫節と名乘つて、道頓堀のまつたゞ中に櫓を上げたその增上慢の鼻つ柱があり〳〵と加賀掾の目にうつると、驚きよりも、一種名狀の出來ぬ、不快の思ひに胸を惡くした。實際のところ、その頃の加賀掾は、氣は若いが寄る年波には僞られず、自身の技藝の日に日に衰へて行くさまを自分自身あり〳〵と知つてゐたので、心は焦燥つてゐるものゝ、それはどうすることも出來ぬ自然の理であつたけれども氣の短かくなつてゐる加賀掾は、義太夫が人を憚らぬ今度の振舞ひを、どうしてもそのまゝに見過ごして置くわけに行かなかつた。で彼れは深く心に決して、老いたりと雖も宇治加賀掾何條彼れしきの青二才に後れを取る可きやといふ意氣込みで、遙々大阪出征を試み、道頓堀に櫓を並べて、いで一挫ぎに討ち平らげんと、こゝに二座對立の壯觀を呈することゝなつたのである。

時に貞享三年の春（異說元年の九月とも）

若い新進の義太夫と、古强者の加賀掾がこゝに端なくも戰端を開く事になつたのも、時勢の然らしむる處、亦止むを得ぬ成行であつた。

加賀掾一座が大阪乘込みの報を耳にした義太夫の驚きは、加賀掾の驚きとは又別なものがあつた。彼れは悲しみもし當惑もした。義を重んずる彼れとして、かりそめにも一旦は師と賴んだ加賀掾と鎬を削つて爭はねばならぬ今度の成行きを如何に嘆いたことか、而し彼れは涙を揮つて覺悟をした。いま若し心弱くも戰はずして師の軍門に降るとせば、曾ては神に誓つて大成を期してゐる、わが新興淨瑠璃を如何せん。藝術の前には最早何ものもない義太夫は堅く決心すると共に、片手では師を拜み片手には扇拍子をとつて、雄々しくも起ち上つた。日ならず、西の義太夫座に對して、東の芝居に宇治加賀掾の櫓が勇ましく上げられた。新舊兩派の興癈、かゝつて此一戰にありとばかり、道頓堀はなんとなく殺氣立つた。

兩軍の陣容如何。先づ加賀掾一派は義太夫が常に近松の作を上演するに對し、當時文壇の飛將軍として文名隆々たる井原西鶴の作『曆』を以て火蓋を切らんとすれば、義太夫座はこれに酬ゆるに、近松門左衛門作るところの『賢女手習並に新曆』をもつてした。かくてこゝに端なくも、文壇の兩雄が各自兩派に已が作を提供して、偶然作者戰を演ずるの壯觀を呈せんとは、戰ひは正に白熱した。

西鶴の『曆』と云ひ、近松がこれに對して『新曆』と双方ともに曆を題材に取り入れてゐるのは、當時頻繁に行はれた曆の改癈といふ事實を脚色したものだと思はれる、我邦で久しく用ひてゐた貞觀三年以降の『宣明曆』を癈して、貞享元年四月『大統曆』を使用したが、これも程なく同年十一月に至つて、どうも完全でないといふので、澁川春海の『貞享曆』が用ひられた。それが現今にまで及んでゐるのであるが、西鶴の『曆』とは想ふに『大統曆』を指しての命題ではあるまいか、また近松の『新曆』とは時にたま〳〵再改正になつた『貞享曆』を當て込んで、遽かに加賀の座の曆に對して、新曆と押つ冠せたのに相違はなく、藝題の上にまで、既に新らしきをひらめかした、新進義太夫座の意氣、見るが如くに彷彿する。

さて、兩座の勝敗如何、哀れや加賀掾座は不評判不入り、さん〴〵の敗北で、中途閉場の止むなきに立ち至つた。これに反して、義太夫座は美ごと敵軍を屠つて、なほ餘裕綽々たるの慨があつた。

無念の齒嚙みをなした老骨加賀掾は、大童となつて、再度陣容を立て直し、今度こそは目に物見せんと轡を鳴らして立向つた。さうして狂言も再度西鶴の作『凱陣八嶋』をもつて對したが、此興行は背水の陣を布いて死物狂ひに戰つた故か、或はこの『凱陣八嶋』の花々しい脚色と、滑稽味などの豐富なところが喜ばれたものか、前回とは打つてかわつた好人氣で、やつと面目を恢復した。かうして

愁眉を開く間もなく、悲運は何處までも悲運で、天この老藝術家に幸ひせず、或夜突然に劇場内から火を發して、劇場はもとより、人形、衣裳、諸道具に至るまで、すべて一塊の燒土と化せしめた。加賀掾の悲痛落膽、思ひ遣るだに哀れの極みである。さすがの老骨、もはや張りつめた我慢も挫け、無限の恨みを呑んで京都をさしてすごゝと引上げて行つた。

宇治はその後再び大阪へは下つて來なかつた。

苦節の十八年

缺損つゞきの興行

旗上げ興行の後一年、義太夫節に、はじめて新興淨瑠璃の意義が見へ出して來た。即ち貞享淨年二月、近松門左衛門は遂に義太夫の爲めに、特に義太夫の長所を發揮せしむべき恰好の作をもたらしたのである。それは『出世景淸』と題するものであつた。そも義太夫が近松と相識る仲となつたのは、義太夫が曾て京の宇治座に在るの時、お互ひに新しい藝術に志すものとして、或は將來を語り、提携の約を結んで置いたものであつたらう、義太夫第一回の旗上げに當然新作を上演す可き筈を、近松は大いに自重して、先づ舊作中の好評ものであつた『世繼曾我』を與へて置き滿一年の後ち、始めて新作の『出世景淸』を提供したのである。さうして今度も、その前途を祝福するの意味をこめて、ことに出世の二字を冠らせてゐる。ところが實はこの出世の二字は義太夫を祝福する意味の他に、實は門左衛門自身をも祝福せねばならぬ、進んだ內容をもつてゐるものなのである。此作の事件と云ひ、人物の性格などに、從來の行き方とは全然ちがつた扱ひを試みてゐる點に於て甚だしく義太夫の所謂新淨瑠璃にふさはしく、密接になつて來てゐる。それはどういふことかといふと、在來は多く物語の形式であつたものが、此作でよほど、劇的な書き方に變化して、筋を生かさうとする努力、おぼろげながら、人物の性格なども描き出さうとしてゐる。本來井上流の剛健味を基調としてゐる。義太夫の藝風には、秋霜烈日の慨ある景淸や、熱情貞烈の阿古屋は、もつともふさはしい、語り物で在來の景事節事に得意をもつてゐる以外、こゝに更に節を生かし天禀を現はす作品を得られたといふことは、一進境を示すものと云つて差支ない。かうして、新派淨瑠璃界に、いよ〳〵新しい曙光の見へ出して來たについて、さて此新傾向を示された當時の社會はどんな風だつたか。——殆んどこの傾向と相ついで、文壇や劇壇にも、異常なる更新が起つてゐて、大方の社會の風潮を物語つてゐるものゝやうである。